

善光寺平南部の条里遺構

Jori Sites in the Southern Zenkoji Plain

市川隆之

- ① 善光寺平の条里遺構の分布
- ② 条里型水田の様相
- ③ 条里施工時期とそれ以前の水田、非条里型水田について
- ④ 条里型水田の特長と施工主体
- ⑤ 条里型水田のその後

【論文要旨】

長野県北部にある善光寺平には条里型地割が認められる地点がいくつかある。そのひとつ更埴条里遺跡において初めて埋没条里型水田が確認されたが、その後、石川条里遺跡や川田条里遺跡でも同時期の埋没条里型水田跡や古代の水田跡の存在が明らかにされた。何れも千曲川沿岸の後背低地に立地する遺跡であるが、近年、これらの遺跡が高速道路・新幹線建設に伴って大規模に発掘調査されたことから新たな知見もたらされた。本稿ではこれらの発掘調査成果を中心に善光寺平南部の古代水田の様相を紹介するものである。

近年の調査成果で注目される点は、9世紀末の洪水砂で埋没した条里型水田跡が広範囲で調査されたこと、広域での半折区画の採用が知られたこと、さらに先行する古代水田跡が一部で確認されたことがある。また、9世紀末の埋没条里型水田が(8世紀末前後から)9世紀前半ごろに成立したと推測されるものの、異区画水田が微妙な時期に存在した可能性が知られるようになり、条里型水田の出現が単一か、段階的なものか微妙な問題を生じている。この問題は所見に不確定なところがあって明確な問題として提起しにくいところもあるが、併せて触れる。

昭和37年に更埴条里遺跡で埋没条里遺構が確認されて以来、善光寺平では条里遺構調査が断続的に行われ、近年では高速道路建設や新幹線・各種道路建設に伴う大規模な発掘調査も実施されている。本稿はこれらの近年の条里遺構発掘成果を紹介するものである。なお、報告書未刊の遺跡もあり、各報告書の刊行を待って検討すべき内容が含まれていることは断っておきたい。

①……………善光寺平の条里遺構の分布

古代北信濃には更級・埴科・水内・高井の4郡が置かれ、各郡に条里遺構と想定される遺跡がある。⁽¹⁾更級郡では石川条里(長野市)・桑原稲荷山条里(更埴市)・八幡条里(更埴市)・力石条里(上山田町)、埴科郡は松代条里(長野市)・更埴条里(更埴市)、水内郡は三輪・北堀・高田条里(長野市)、高井郡は川田条里(長野市)などである。⁽²⁾このなかで発掘調査で平安時代に遡る条里遺構が確認された遺跡として更級郡の石川条里遺跡、埴科郡の更埴条里・屋代遺跡群、高井郡の川



図1 善光寺平南部の条里遺構と古代遺跡 (1:100,000)

田条里遺跡があり、これ以外に条里遺構が不明ながら上山田町力石条里遺跡や坂城町青木下遺跡で古代水田跡がみついている。いずれも千曲川沿の後背低地の遺跡であり、川田条里以外はほぼ単一時期（9世紀末ころ）の洪水砂で埋没した水田跡が検出されている。この洪水は文献記録にみえる仁和4年（888）頃の洪水に対比する説が有力視されている。その起因は千曲川上流の八ヶ岳水蒸気爆発に伴う泥流が千曲川を堰き止め、それが決壊して大洪水になったとされるもので、泥流の年代は近年ほぼ887年と特定された。この洪水砂層は各遺跡において最も厚い砂層と認められ、千曲川沿岸広域で確認されていることから通常の洪水と異なる大規模なものであったことは間違いないだろう。

②……………条里型水田の様相

善光寺平南部で発掘調査された古代水田跡には屋代遺跡群の7世紀後半～8世紀前半頃の所産、更埴条里遺跡や川田条里遺跡の8世紀後半～9世紀前半頃の所産もあるが、大部分は9世紀末の洪水で埋没したものである。この9世紀末の埋没水田跡は一般的に知られる条里区画に合致するもので条里型水田と認定されている。以下にはこの9世紀末に埋没した条里型水田の様相を紹介する。

原則的な区画方法

これまでに知られる9世紀末の水田跡は条・里が判然としないものの、1辺110m前後四方の大畦区画（坪）が広域に認められ、その内部は南北2等分、東西5等分する幅20～23m・長さ50～56m前後の長方形区画（半折）10枚に分割される。半折区画内は更に小畦で細分されるものがあるが、区画方法は同一遺跡内でも多様であり、地形傾斜や耕作状況で異なると考えられる。各畦の規模は坪を区画する大畦が幅2m前後、半折畦は幅50cm前後、半折内部の畦は幅30cm前後が多く、区画範囲が広い畦ほど規模が大きい傾向が認められる。更埴条里遺跡では他に幅4～5m前後の畦が南北1本、東西1本検出されており、条里区画の基準ラインではないかと目されている。⁽⁵⁾水田区画の方位はいずれもN-2～10°-W前後で大きくずれるものはない。異なる郡に帰属し、川や尾根で隔てられたそれぞれの条里水田遺跡では少なくとも9世紀末に類似区画方法が採用されていた可能性が想定しうようになってきた。ただし、条・里の位置が判然とせず、同じ区画基準線を用いていたかは不明である。

条里型水田内の異質な区画

上記は基本的な区画方法であるが、条里区画内に異質な区画が認められる場合がある。これは条里区画に則りながらも部分的に畦が検出されなかったものと、条里区画とはまったく異なる原理の区画が重なる2種がある。前者として石川条里遺跡で部分的に半折畦が検出されなかった例がある。これはごく部分的なもので認定に不安を残すが、隣接した半折で関連耕作されていた状況を示すものかもしれない。後者の例では同じく石川条里遺跡で異方位の畦が条里区画内に併存していた例がある。子細は後述するが、条里型水田以前の溝跡に直交・平行する畦が条里区画内に認められ、条里施工以前の区画の利便性をそのまま条里内に取り込んだと思われる。また、一坪内でこうした区

画が顕著に認められたことから「坪」が耕作上の何らかの単位であった可能性が窺える。なお、更埴条里遺跡・川田条里遺跡では半折畦に近接して非常に細長い溝状の水田区画がいくつか検出された。この水田区画の性格は不明であるが、現条里型水田景観を残す地域の苗代に利用される水田と類似した形態ではある。⁽⁶⁾これ以外の非条里型水田については後述する。

配水

条里型水田の主水源は周囲山地からの中小河川と千曲川が想定されるが、更埴条里や石川条里遺跡では中小河川が少ない地域であることから千曲川取水用水に比重が置かれていたと思われる。この千曲川取水の幹線用水と思われる溝跡が更埴条里遺跡に隣接した屋代遺跡群、あるいは石川条里に隣接した篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群など自然堤防上で検出されている。近世の千曲川取水用水は洪水で破壊されやすく、流路移動によっては近隣村との争いが発生するなど、ごく不安定な用水であったことが知られる。⁽⁷⁾この近世の状況から千曲川取水用水は想定しがたいとも思われるが、後背低地よりも高い自然堤防背面にも水田跡が分布することから千曲川取水用水を想定せざるをえない状況である。古代では大量の労働力が投入されて千曲川取水用水が構築・維持されたのだろう。石川条里遺跡に隣接する塩崎地区で千曲川系用水と推測される溝跡が9世紀末の洪水砂以後に放棄されるが、屋代遺跡群・更埴条里遺跡は数度復旧が試みられている。この千曲川取水用水の復旧の可否が中世水田のあり方の差を生じたようだ。なお、屋代遺跡群では自然堤防背面の古墳時代水田跡の存在から千曲川取水用水は古墳時代に遡る可能性も想定されている。石川条里遺跡の塩崎地区では古墳時代に遡る溝跡が検出されておらず、集落遺跡自体が少ないことも、用水の存否が関連するのかもしれない。ちなみに、塩崎地区で千曲川取水用水が維持しにくい理由として千曲川の攻撃面側にあつて用水が破壊されやすいことが考えられる。

自然堤防上に導かれた基幹用水は屋代遺跡群高速道路地点で確認されたようにいくつか大畦上に設置された枝用水に分岐する。その用水数は意外と少なく、水田内配水は畦越が基本となっている。これは従来の地表面観察から指摘されていた見解にほぼ一致する。ただし、古代の条里型水田が広域に及ぶことからすべての水田に十分な配水ができたのかどうか、田植や収穫時期のずれをどのように解決していたのかは明らかでない。

耕作痕

更埴条里遺跡・屋代遺跡群では足跡等の窪みが残る水田面、鋤・鍬による田起と思われるブロック状土塊が分布する水田面、牛・馬鋤痕と思われる浅い筋状の溝が複数並列する水田面、自然堤防付近の畝痕を残す畑跡が認められた。牛馬鋤痕を残す水田跡は基本的に半折単位で認められ、同様の耕作が隣接した半折で認められた例がある。この痕跡は代掻の可能性も想定されているが、溝幅に一致する出土馬鋤例がないこと、水田面に痕跡が残る点から唐鋤による荒起の可能性⁽⁸⁾がある。荒起ならば場所ごとの耕作手段の差が想定しうるし、代掻ならば水が入った状態で耕作痕を残さない水田面は耕作されていないことになる。鋤・鍬による田起と思われる痕跡は更埴条里遺跡南部の比較的傾斜のある地点で半折内の細分水田ごと、あるいは水田1枚の途中までのものもあるが、分布状況から半折が耕作単位と考えられる。⁽⁹⁾

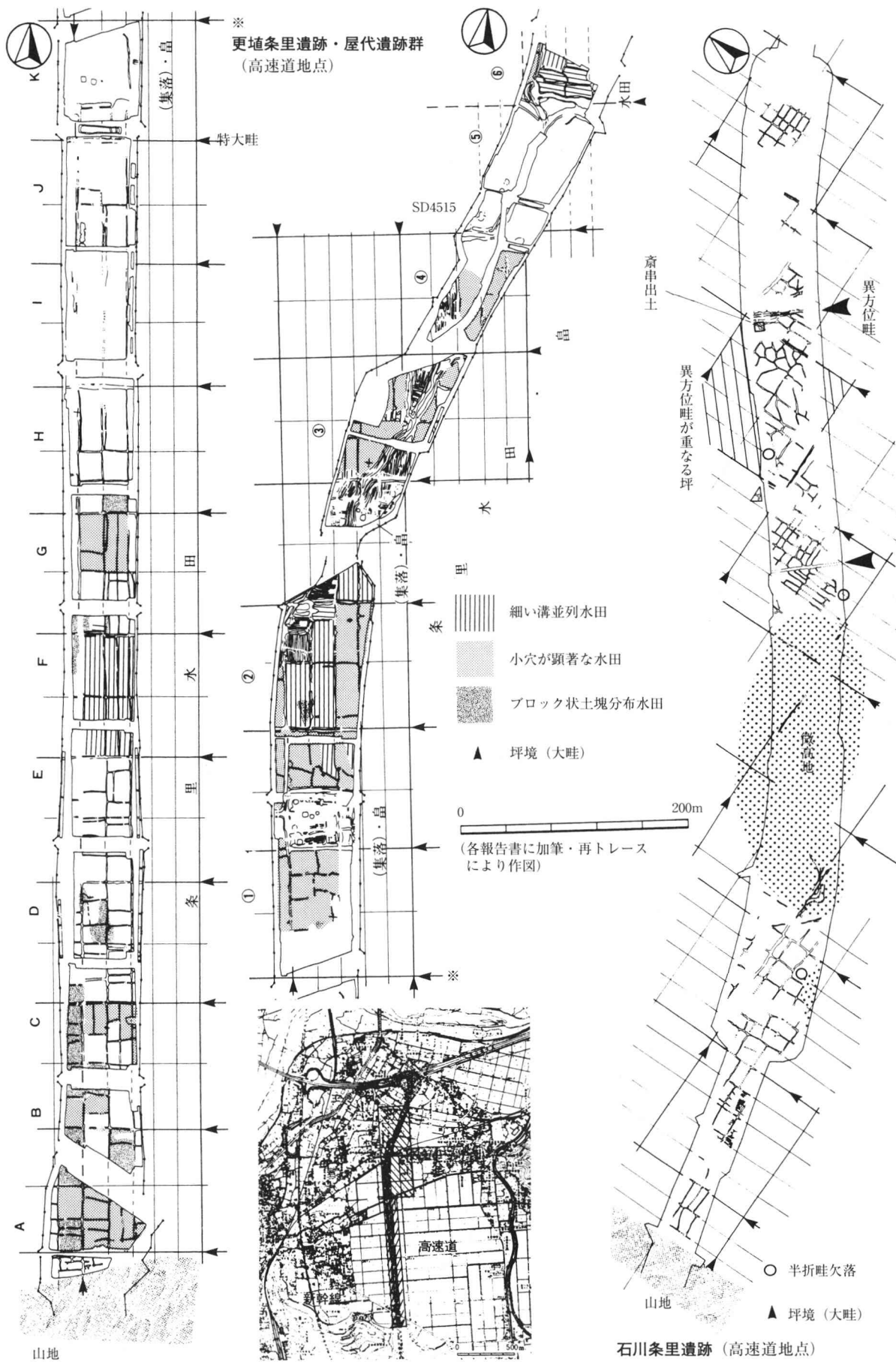


図2 善光寺平南部の発掘された条里遺構

祭祀

水田内の祭祀行為を想定させるものとして齋串、馬骨、墨書土器を含む完形土器出土がある。馬骨は歯を中心に大畦等で出土し、屋代遺跡群（新幹線）では水口付近の大畦内に馬頭骨が埋め込まれていた例がある。齋串の出土例は少ないが、石川条里遺跡で芯材を入れて補強した大畦内より出土した。復旧や維持に関連して齋串を用いた祭祀が行われたと推測される。墨書土器を含む完形土器の出土は水田面で認められたものと畦内に残されたものがあるが、畦内のものは本来水田面で行われた祭祀行為の残存かもしれない。水田面の完形土器出土では水口に須恵器甕を置くものと大畦付近に杯多数が置かれた例が認められている。前者の例は屋代遺跡群にあり、後者の例は石川条里遺跡で墨書土器を含む10点前後が集中出土した例がある。墨書土器には則天文字「𠄎」, 「木」, 「北」, 「今」(「峯」の変形?)などの文字があり、則天文字の「𠄎」はほぼ同時期の隣接する篠ノ井遺跡群で多数出土している。上記の祭祀遺物は時期や目的別に整理できていないが、多様な祭祀行為が水田で行われたことは想定しうる。また、祭祀行為は遺跡全体というより、個別に行われ

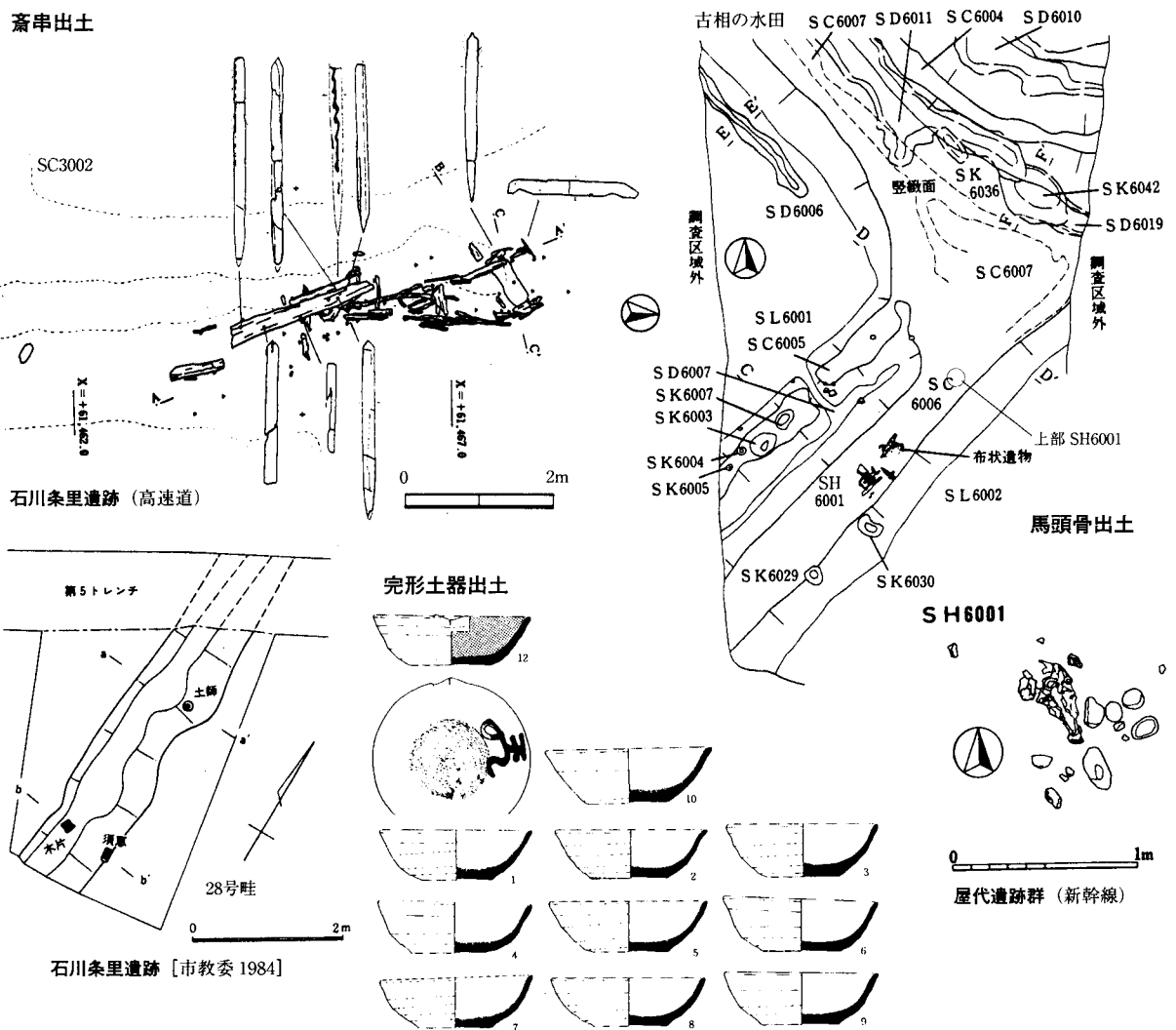


図3 条里水田出土祭祀遺物 (報告書をもとに作製)

ているようだ。

条里型水田の範囲

善光寺平で9世紀後半の条里型水田は非常に広域に検出され、その範囲は現地表面に条里地割を残さない地域や畑地となる部分にも及ぶ。埋没条里型水田内の畑や集落域として利用される小微高地は条里区画に編成されているが、自然堤防上の竪穴住居跡や溝跡には条里に一致しない方位が認められる⁽¹⁰⁾。このことから条里区画は水田域を中心に施工されたと考えられ、集落との境界については屋代遺跡群④区で条里区画に一致する溝跡（SD4515）が構築されていることが知られたが、他では境の様相が判然としない。なお、屋代遺跡群新幹線地点では千曲川よりの旧河道跡で異方位の水田跡が検出されたが、自然堤防上に条里区画が施工されていないことによるものだろう。

③……………条里施工時期とそれ以前の水田、非条里型水田について

近年、条里型水田の施工時期を探るなかで施工時期前後に非条里型水田が併存する可能性が出てきている。これは条里の施工経過や施工年代に関連した問題でもあるので併せて述べることにしたい。ただ、この問題は事実認定自体に不安があって明確な問題として扱えるか不安がある。

非条里型水田

長野県では古代の非条里型水田跡も検出されており、明らかに条里施工時に併存するものと、施工前後か若干遡る微妙な時期のものがある。前者の例として佐久市砂原遺跡、更埴市屋代遺跡群新幹線地点が挙げられる。砂原遺跡は千曲川沿いに立地し、9世紀末前後の洪水で埋没したとみられる。部分的に正方位の畦区画が採用されているが、大部分は湾曲した畦で区画され、条里区画原則には則らない。屋代遺跡群（新幹線地点）の水田跡は自然堤防より千曲川寄りの旧河道内にあり、水田区画方位は条里型水田と異なるが、大畦区画はほぼ110m前後である。内部の半折区画は判然としないが、類似した区画があるように思われ、基本的には条里型水田に準ずるものとみて良いだろう。

一方、後者の例として川田条里遺跡、更埴条里遺跡例がある。いずれも条里型水田の下層で検出されているが、各水田跡の推定年代が他地点の条里施工時期に近似する。川田条里遺跡では条里型水田の下層で古墳時代後期水田と類似形態の水田跡が検出された。この水田跡を埋める土層より取り上げられた遺物に8世紀後半?~9世紀前半の土器が含まれており、他地区の条里型水田の推定年代と重複する可能性がでてきている。ただ、川田条里遺跡では他地区の条里型水田と土層対比による同時性は捉えられておらず、推定年代も条里施工前後の微妙な時期である。また、更埴条里遺跡では調査区南端の低地において条里型水田下層で泥炭埋没水田跡が検出され、その畦内より9世紀前半~中頃の須恵器杯破片が出土した。泥炭埋没下層水田跡を須恵器の年代とすると、更埴条里の北部で条里施工されていた時期と重複することになる。もちろん、泥炭堆積が認められているように一旦耕作放棄された場所でもあり、川田条里と同じような併存状況とはいえないが、条里施工が部分的に追加—拡大していく可能性を示す点は同じである。この更埴条里遺跡の場合も出土遺物

が僅かであり、水田年代の比定に問題を残している。

条里の施工年代

上述したような条里施工経過の問題があるが、現時点での施工開始時期については石川条里遺跡を除く屋代遺跡群・更埴条里遺跡、川田条里遺跡で推定資料が得られている。屋代遺跡群の新幹線地点では9世紀中頃の住居跡の上に先述した異方位の条里が構築され、高速道路地点では9世紀前半の住居跡の上に条里型水田が構築されていた。また、更埴条里遺跡の水田内にある微高地で正方位の住居跡が出現してくるのは(8世紀末?)9世紀前半であり、条里区画に一致する最も古い溝跡(SD974)もほぼこの頃と捉えられている。川田条里遺跡では条里型水田下層で古墳時代後期水田に類似する形態の水田跡が検出され、この水田面を埋める砂層より8世紀後半~9世紀前半の土器⁽¹¹⁾が出土している。

上記以外に条里施工時期を想定しうる資料として条里型水田域周辺での竪穴住居跡主軸方位の変化がある。条里に近似する方位の竪穴住居跡は更埴条里遺跡新幹線地点では8世紀末~9世紀初頭、屋代遺跡群新幹線地点南部(2区)では8世紀末から9世紀初頭に一部認められ、9世紀前半にほぼ統一されている。上記から条里の施工開始時期は9世紀前半がほぼ確実視され、遡って8世紀末~9世紀初頭の可能性も残る。各遺跡で若干の時間差はあるが、近似時期に条里が施工されはじめの可能性は想定しうる。

条里の施工経過

9世紀末では広域的な条里型水田が存在したとみられるが、上述したように施工経過が単一契機か、非条里型水田と併存しながら段階的な施工かの問題が生じている。ただ、段階的施工を想定する場合も基本的には条里型水田指向は変わらず、想定される時間差も大きなものではない。条里施工開始前後の短い時間差の問題かもしれない。

ところで条里の施工はどのように進められたのだろうか。これについては更埴条里遺跡において最も大きな畦を基準線として条里区画が施工された可能性が想定されている以外は明らかでない。しかし、単一契機に施工されたとしても単一年に広域すべてを条里型水田に変えることは困難と思われる。複数年次にわたって施工された可能性は十分考えられる。こうしたことを考える上で更埴条里遺跡の一部の半折と大畦真下で検出された埋没溝跡は注目される。この溝跡の機能は不明であるが、すべての半折・大畦下で認められておらず、ごく一部でしか認められないことから普遍的な条里設定にかかわる溝跡とは考えにくい。畦下の溝跡は東西方向のものが優位であり、条里型水田内の用水も東西方向のみであることからすると用水の可能性もある。あくまでも推測であるが、条里施工にあたり、旧来水田と条里型水田のずれから生じる水回しの問題を調整する目的で臨時に設定されたものかもしれない。

条里施工以前の水田

条里型水田以前とされる古代水田跡は川田条里遺跡、屋代遺跡群、更埴条里遺跡にあり、条里以前のの水田様相が間接的に知られる例として石川条里遺跡例がある。川田条里遺跡例は古墳時代後期

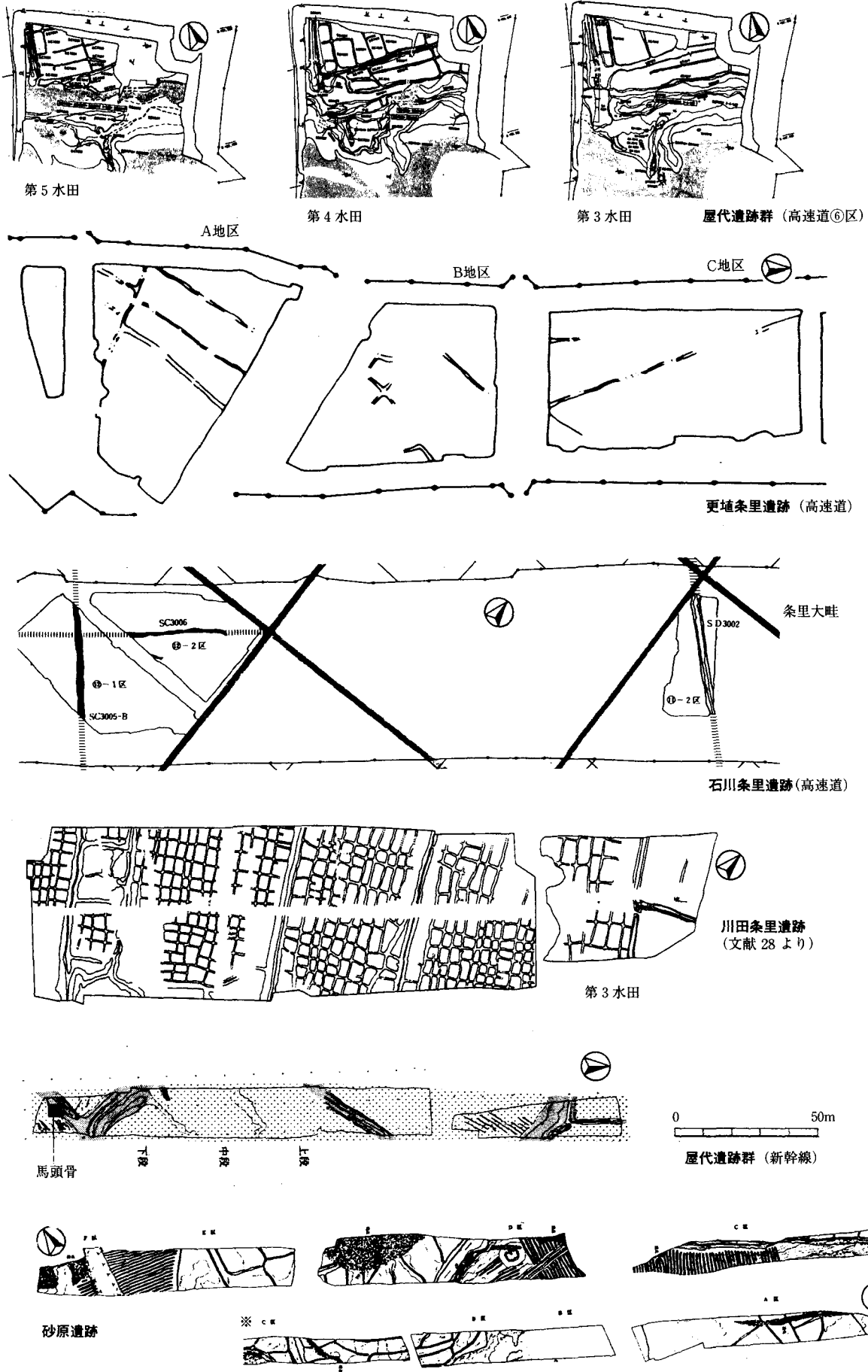


図4 非条里型水田・条里以前の水田跡 (各報告書をもとに作製)

の用水・大畦位置と近接・重複する位置に大畦を配置し、内部を小区画水田とする。区画方位は地形に合わせた古墳時代後期水田と類似したものである。ただ、大畦の間隔は20m強、あるいは40～50m間隔に配置されているようにもみえ、面積を一定にする意識があるようにも感じられる。年代は出土した土器から8世紀後半から9世紀前半とされる。屋代遺跡群では千曲川寄りの旧河道内^(補註2)で7世紀後半?～8世紀前半の第5～3水田と呼称される3枚の水田跡と9世紀代の第1・2水田跡の2枚の水田跡が検出されている。ごく僅かな範囲の調査で全体像は判然としないが、ほぼ正方位を指向する点は共通する。7世紀後半前後の第5水田は大畦区画内を幅約5～8m、長さ約12m前後の東西方向に長い長方形水田に分割するもので、7世紀末～8世紀前半でも初頭に近いころの第4水田は水田面積はほぼ同様ながら長軸は南北方向優位に変化している。8世紀前半頃の第3水田は幅4～12mながら長さ15～32m以上の細長い水田区画であり、第5・4水田とこの第3水田⁽¹²⁾では大きく形態が異なっている。更埴条里遺跡高速道路地点例は先述したように条里型水田下に泥炭埋没水田として検出されたものである。年代は先述した通りで、地形に合わせた幅10～15m、長さ約45m以上の細長い長方形に区画する。石川条里遺跡では9世紀末の埋没条里水田面において条里型水田以前の溝跡とほぼ平行・直交する畦が認められ、併せて直交する疑似畦畔が条里型水田耕作土層下で検出された。いずれも大畦と推定され、畦方位は基本的に地形に合わせているようだ。内部区画は不明であるが、平行する条里水田面に残った大畦と条里型水田下の埋没溝跡の間隔はほぼ220mにはなる。

上記は現時点で条里施工前の古代水田と推測されている例である。地形に合わせるものが多いが、水田跡の区画方法は川田条里遺跡のように古墳後期の水田系譜とみられるものもあれば、屋代遺跡群高速道路地点のように条里とも古墳後期水田とも形態が異なるものもある。層的に把握された屋代遺跡群高速道路地点例からすると古墳後期的な小区画水田から、条里とも異なる細長い区画への変化も想定される。しかし、第4・5水田は古墳後期的な小区画水田と同一視しうるか不安があり、第3水田も更埴条里A地区の条里以前の水田跡に類似するものの、普遍性や同時性が確定できていない。現時点では条里以前の水田形態は一定の水田型としてまとめられず、立地地形の問題や水田年代確定を含めて大きな課題として残る。なお、川田条里遺跡や石川条里遺跡例の条里以前の水田跡でも水田面積を一定にする意識はあった可能性は考えられる。

④……………条里型水田の特長と施工主体

条里型水田の特長

上記より条里型水田の特長は広域的に正方位を指向する同一基準で区画される点にあると思われる。しかも、以後の水田が条里指向となるように後代の水田形態へも影響を与えている。この条里型水田の特長で注意されるのは水田面積を一律同じとする点である。もちろん、同時代には砂原遺跡のような非条里型水田もあったが、屋代遺跡群新幹線地点の水田跡から条里型水田域では面積を均等にする指向をもつと考えられる。このような条里区画の坪・半折はどのような単位とみられるだろうか。現時点でその区画の意味について考古学的に明らかにできていないが、更埴条里遺跡高速道路地点の耕作痕から基本的に耕作単位であった可能性が知られる。さらに更埴条里遺跡では隣接

した半折に同じ耕作痕が認められた例があり、複数半折が関連耕作者で耕作される場合もあったようだ。坪についても石川条里遺跡の異方位畦分布や祭祀関係遺物の出土から何らかの耕作に関連した単位とみられる。

地域開発と条里施工主体

近年、静岡県で東海道が条里設定基準線となっていた可能性が想定されている⁽¹³⁾。同様に長野市三輪・桐原周辺の条里も水内一高井郡衙をつなぐ道を基準としている可能性が福島正樹氏によって指摘され⁽¹⁴⁾、河西克造氏も更埴条里遺跡のほぼ中央を東西に走る道状の大規模な畦を設定基軸と想定している⁽¹⁵⁾。更埴条里遺跡の特大畦は特殊なことは間違いないが、このラインは更埴条里遺跡・屋代遺跡群境の五十里川^{いかりがわ}を斜めに横断すること、自然堤防上に想定される中核集落や寺院跡周辺を通過しないことから幹線道といえるか問題は残る。なお、先述したように自然堤防上の堅穴住居跡は条里施工時期でも同方位とならない例があり、現段階では条里区画は水田域を中心として集落を含めた地域全体の土地区画編成ではないと考えている。

ところで、条里は誰によって施工されたのだろうか。善光寺平では類似時期に出現し、しかも区画方法や方位も類似していることから郡を越える動きのなかにあったと推測される。ただ、実際の施工にあたってどのような人間が主体となったかは問題である。こうした構築主体を推測させる直接的な材料はないが、現時点で知られる集落遺跡の展開との関係から推測してみたいと思う。

長野県下では7世紀後半から8世紀初頭にかけて突然集落遺跡が出現し、これらの集落遺跡は集合・分散を繰り返しながらほぼ9世紀末ころまで存続する例が多く認められている。石川条里遺跡では古墳後期の土器出土は非常に僅かであったが、7世紀後半前後から出土量が増加する傾向が知られた。隣接する篠ノ井遺跡群の集落出現年代と近似することから、ほぼ同時期に水田開発も着手された可能性が想定できる。ただし、この時点では条里型水田は施工されてないとみられる。また、8世紀後半、あるいは8世紀末～9世紀初頭にかけて松本平では須恵器杯Bの法量分化が進展し、最も集落遺跡が拡散して堅穴住居跡すべて正方位を指向することが明らかにされている。この時期に律令体制が整備・再編成された可能性がある。この8世紀末～9世紀初頭の時期では堅穴住居跡規模の分化が認められ、やがて9世紀に大規模な堅穴住居跡を中心として緑釉陶器や同一文字墨書土器を多出する中核的集落があらわれてくる。現時点の条里の施工時期は律令体制の整備・再編成時期から9世紀に発展する集落が生成されてくる段階に一致するとみられ、このような9世紀に中核となる集落か、その前身集落が条里施工にかかわっていた可能性は高い。ただ、条里施工時期が8世紀末～9世紀初頭とする場合と9世紀前半とする場合では大きく評価が異なる可能性がある。すなわち、前者は国一郡の関係によるとも想定しうるが、後者の例である更埴条里遺跡高速道地点の水田内微高地の集落遺跡では畿内系土師器が多出し、畿内との個別的な関わりも考えられる。ただし、畿内との関係で施工されたものならば、条里施工時期の類似や区画方法の類似といった問題が残る。詳細は9世紀集落の評価を含めて今少し検討が必要と思われる⁽¹⁶⁾。

⑤……………条里型水田のその後

9世紀末に広域に認められた条里型水田は10世紀以後に千曲川用水の復旧可否により、地域ごとに異なる変遷をたどるようだ。以下には千曲川系用水復旧が図られた更埴条里・屋代遺跡群と、千曲川取水用水を放棄した石川条里遺跡を比較しながら10世紀以後の様相を紹介しておく。⁽¹⁷⁾

洪水直後(10世紀前半)では更埴条里遺跡や篠ノ井遺跡群において自然堤防の後背低地側や後背低地内微高地に近い水田であった場所に集落遺跡が出現し、この集落を中心に水田復旧が図られたようだ。いずれの集落遺跡も長期の継続性がみられない。篠ノ井遺跡群の集落は9世紀後半集落と重なりながら位置し、同文字の墨書土器を保有することからも洪水前の中核的集落に続くものとみられる。一方、更埴条里遺跡では後背低地寄りに新たに出現したもので系譜は明らかでないが、緑釉陶器・越州窯青磁や銅印「王強私印」を出土する特異な様相が認められる。なお、塩崎地区では洪水で埋没した千曲川系用水とみられる溝跡は復旧されず放棄される。

次の平安時代後半であるが、屋代遺跡群・更埴条里遺跡高速道地点では10世紀後半に集落がやや北側に展開してそれ以前と異なった用水が設置される。しかし、10世紀末～11世紀初頭には廃絶され、一方で堅穴住居跡は自然堤防へも拡散しだす。この時期には犀川扇状地に立地する南宮遺跡など条里型水田の分布域以外で大規模な集落が認められる。古代の広域的な条里型水田は千曲川取水用水の復旧維持が不可欠であったが、労働力が分散(?),あるいは集落が拡散傾向をもったために広域的な耕地維持がかなわず、水田開発の分散化、旧来の耕作地域の縮小現象を引き起こしたとも考えられる。

平安末期前後では更埴条里・屋代遺跡群周辺に倉科荘、石川条里遺跡内の聖川北部に石川荘・南部に四ノ宮荘が成立する。いずれも成立年代は不明で考古学的知見も得られていないが、荘園名に冠する地名は現在周囲の山地から流れ込む中小河川沿いの山手に残る。このことから各荘園は中小河川を中核として成立した可能性がある。また、石川条里遺跡内では石川荘と重なる長野市川柳地区、四ノ宮荘に重なる塩崎地区の現境は聖川周辺の条里に則る土手状の畦を直線的に貫いている。両荘園が条里区画を踏襲するなかで荘境が設定された可能性がある。この平安末期(12世紀以後)から中世前半期の屋代遺跡群では自然堤防上に再び集落遺跡が多く認められ、千曲川寄りの窪河原遺跡でも畑跡が確認された。これ以後は何らかの形で断続的かもしれないが、耕地維持が図られたようである。しかし、水田遺構は遺存状態不良で具体的な様相はつかめていない。一方、石川条里遺跡では居住遺構は判然としないが、山際で部分的な水田跡と低地内の古代用水を作り替えた大きな用水が検出された。これら断片的な様相から山手の沢水や中小河川を基軸とした条里型水田に変化したようだ。しかし、石川条里遺跡では聖川から二つの荘園へ引水するために冠水範囲は聖川沿いに限定された可能性が高く、四ノ宮荘域の聖川沿いの現地表面には条里区画を残すが、聖川から離れる南部は条里区画を残さないところが多い。

中世後半の水田跡は遺構が残存しないことから様相は不明瞭であるが、用水と居館跡との関係においていくつか見通しが得られてきている。屋代遺跡群高速道路地点①区では中世前半に比較的大きな掘立柱建物跡が分布していたが、やがて建物跡が小規模化していく傾向が知られた。その要因

は不明ながら、自然堤防上に居館跡が複数近接して存在することから、武士が自然堤防側に入って地域編成を行ったことに関連するとも考えられている。これらの居館跡の全体発掘例はないが、地籍図から堀が一重の1辺100mと50m前後のものが知られ、部分的な調査から15世紀前後に併存した可能性がある。⁽¹⁸⁾ 居住者は13世紀後半に倉科荘に入ってきた屋代氏かその関係者の系譜の者とも思われる。もちろん、上記の居館跡は13世紀後半ころの屋代氏の居館と断定できないが、山手の中小河川を基軸とする倉科荘と対峙して自然堤防地域に武士が入り、ここを中核として再開発・編成を進めていった可能性はある。ちなみに、更埴条里中央には現地割を斜めに貫く用水が2本存在するが、荘園との関係で設定された境なのかもしれない。

石川条里遺跡では条里景観残存地点に隣接した小微高地で居館跡が検出された。この居館跡は中心屋敷規模50m四方で、外側にも二重に堀を配置する。外堀の位置は現字「^{くわした}楸下」と一致し、この字範囲内には条里景観を残す水田域外縁部の水田が含まれる。また、館跡では中世前半からの遺物も出土しているが、堀を備えた居館跡は14世紀後半(末)から15世紀にかけて存続したと推測され、この時期前後に隣接水田内の古代用水を継承した用水が廃絶している。つまり、石川条里遺跡の居館跡は旧来よりの条里残存地域隣接地に立地して用水編成を行うと共に、その周辺部に直営水田を確保していた可能性がある。ところで、屋代遺跡群周辺と石川条里遺跡周辺の居館跡は数や形態・立地が大きく異なる。その差は自然堤防を本拠として千曲川系用水を基軸とした屋代地区の編成の仕方と、千曲川取水用水を放棄して中小河川を基軸とした塩崎地区の編成の仕方の差かもしれない。また、石川条里遺跡の居館跡がより直接的に水田域と関わることは支配関係が複雑な歴史的背景も関連しよう。⁽¹⁹⁾

戦国時代以後の様相は遺構が不明瞭で判然としないが、当該期には居館跡の大部分が廃絶して居館跡の様相が不明となってしまふ。これは長野市周辺に共通する。一方、石川条里遺跡では16世紀後半から水田内の遺物出土量が増加してくる傾向が知られ、この時期から新たな水田編成が加えられたようである。この動きは武士支配の変質と村落による水田管理の変化を示すものかもしれない。近世は低地埋積で平坦化が進み、水田1枚の面積拡大と水田内小微高地周辺部が水田に取り込まれていく傾向が知られた。そして幕末には用水網の整備で現在みるような景観が作られていったようである。⁽²⁰⁾

以上、憶測を交えて雑駁な紹介を試みた。報告書未刊の調査遺跡もあり、今後変更が必要などころも多いと思われる。報告書の誤読や事実関係の誤認があれば責は筆者にある。なお、本稿を草すにあたり河西克造、宮嶋義和、白居直之、寺内隆夫、鶴田典昭、原明芳各氏には情報提供やご教示いただいた。文末ながら記して感謝の意を表したい。

註

(1)——各遺跡の様相は文末に挙げた各報告書による。報告書未完のものは担当者のご教示によった。なお、長野市石川条里遺跡・篠ノ井遺跡群や更埴市更埴条里遺跡・屋代遺跡群については長野県埋蔵文化財センターの報告書を中心にまとめ、同一遺跡内で高速道・新幹線に

関わる調査地点は高速道地点・新幹線地点として区別した。川田条里遺跡については長野県埋蔵文化財センター調査分についての公表資料と整理担当者である河西克造・鶴田典昭氏らのご教示を参考とした。

(2)——県内の条里遺構は現地表面観察などから想定さ

れているが、実際の範囲や単位については諸説あり、考古学的な遺跡の扱いも必ずしも統一的な認識とはなっていない。ここでは長野県史を参照とした(井原今朝男 1989「第4章 第4節 条里と荘園」『長野県史通史編 第1巻 原始・古代』長野県史刊行会)。

(3)——河内晋平 1983「八ヶ岳大月川岩屑流」『地質学雑誌 89-3』・1983「八ヶ岳大月川岩屑流のC¹⁴年代」『地質学雑誌 89-10』・1985「八ヶ岳 888年の大月川岩屑流」『地質と調査 1985-2』などがある。これについて島田恵子氏の批判がある。1988「八ヶ岳崩壊の仁和四年説に関する考察」『千曲 56』

(4)——屋代遺跡群の千曲川寄りに位置する低地⑥区では層厚約1.6mに及ぶ。

(5)——河西克造 1999「第8章 第8節 条里水田の成立と展開」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』長野県埋蔵文化財センター

(6)——井原今朝男 1989「第4章 第4節 条里と荘園」『長野県史通史編 第1巻 原始・古代』長野県史刊行会

(7)——1971『塩崎村史』塩崎村史刊行会

(8)——河西克造氏は代掻と推測している(1999「第8章 第8節 条里水田の成立と展開」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』長野県埋蔵文化財センター

(9)——白居直之氏のご教示による。

(10)——石川条里遺跡に隣接した篠ノ井遺跡群では顕著である。

(11)——整理担当者の河西克造氏のご教示による。

(12)——ただし、屋代遺跡群高速道地点⑥区の水田跡では7世紀後半頃からの大畦がそのまま9世紀末まで踏襲されている。

(13)——矢田勝 1997「条里の広域施工時期と変遷過程についての試論」『研究紀要第5号』(財)静岡県埋蔵文化財研究所

(14)——福島正樹 2000「第3章 第4節 古代から中世へ 旧長野市街地の条里的遺構」『長野市誌第二巻 歴史編 原始・古代・中世』長野市誌編さん委員会

(15)——河西克造 1999「第8章 第8節 条里水田の成立と展開」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』長野県埋蔵文化財センター

(16)——松本平では9世紀前・中頃に1辺10mを越える堅穴住居跡を中核とし、同一文字墨書土器や緑釉陶器

などを多出する大規模な集落遺跡が認められている(小平和夫 1990「第4章 第1節 古代の集落」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 松本市内その1 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会)。こうした大型堅穴住居跡や掘立柱建物跡が中核となる規模の大きな集落遺跡は県下各地で認められるようになっており、何らかの共通した歴史的な動向のなかで成立したものとみられる。ただし、代表例となる松本市下神遺跡は初期荘園と目されているが、他の遺跡については明らかにされていない。また、下神遺跡周辺で条里型水田と想定されているところがなく、こうした9世紀代の中核集落が条里型水田とセットで展開したのかも断定できていない。類似した歴史的背景のなかで成立しながらも性格・集落の系統は多様なものが含まれる可能性はある。

(17)——屋代遺跡群の様相については宮嶋義和氏のご教示による。

(18)——小島道裕 1995「第2章 第4節 城下町調査」『屋代城跡範囲確認調査報告書』更埴市教育委員会

(19)——塩崎地区は鎌倉時代に諏訪氏系の四宮氏の所領であったが、やがて南北朝期に滅亡して同族の諏訪円忠の所領となる。ところが守護小笠原氏の侵食とそれに対する村上氏の争いで混乱し、室町時代には小笠原氏配下の赤沢氏、室町時代末期には塩崎氏の支配するところとなる。この塩崎氏の出自は諸説あり、赤沢氏系の武士とは言い切れない。これ以外に戦国時代に清水氏などの武士がいたとされるが子細不明である。

(20)——江戸時代の塩崎地区では中小河川と溜池が主な水源であった。そのため干害に悩まされていたが、江戸時代末期に千曲川取水用水の塩崎用水が構築されて現在の水田地帯の景観がつくられたようだ。(註(7)の文献)

(補註1)——1998年、洪水の原因とされる大月川岩屑なだれ内の埋もれ木が掘り出され、年輪年代測定が実施された。その結果、『扶桑略紀』にみえる887年に一致することが明らかにされた(1999.12.23.朝日新聞長野版、同12.28.中日新聞記事、2000 光谷拓実「自然災害 長野県八ヶ岳崩落は887年と確定」『埋蔵文化財ニュース 100』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、2000 川崎保「仁和の洪水」砂層と大月川岩屑なだれ」『長野県埋蔵文化財センター紀要 8』長野県埋蔵文化財センター)。

(補註2)——長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 10 川田条里遺跡』

参考文献

- [1] 1978 更埴市教育委員会『屋代馬口K』
- [2] 1986 更埴市教育委員会『屋代遺跡群馬口遺跡』
- [3] 1987 更埴市教育委員会『屋代遺跡群馬口遺跡II』
- [4] 1988 更埴市教育委員会『長野県更埴市屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告』
- [5] 1989 更埴市教育委員会『屋代遺跡群馬口遺跡III』
- [6] 1994 更埴市教育委員会『長野県更埴市屋代遺跡群大境遺跡IV・V』
- [7] 1978 長野市教育委員会『田中沖遺跡 第1次発掘調査概報』
- [8] 1980 長野市教育委員会『篠ノ井遺跡群』
- [9] 1984 長野市教育委員会『石川条里的遺構・上駒沢遺跡』
- [10] 1989 長野市教育委員会『石川条里遺跡(4)』
- [11] 1991 長野市教育委員会『塩崎遺跡群(6)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川条里遺跡(5)』
- [12] 1991 長野市教育委員会『田中沖遺跡II』
- [13] 1991 長野市教育委員会『石川条里遺跡(6)』
- [14] 1992 長野市教育委員会『南宮遺跡』
- [15] 1992 長野市教育委員会『篠ノ井遺跡群(4)』
- [16] 1993 長野市教育委員会『石川条里遺跡(7)』
- [17] 1968 長野県教育委員会『更埴条里遺構の研究』
- [18] 1990 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編』
- [19] 1997 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡 第1分冊』
- [20] 1997 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 篠ノ井遺跡群』
- [21] 1998 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3 屋代遺跡群・更埴条里遺跡』
- [22] 1998 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1 県・県西南部・池尻・小田井城南部台地・唄坂・金井城跡・中金井・栗毛坂・下蟹沢・長土呂・常用居屋敷・前田・砂原・中平・田中島・土合』
- [23] 1999 長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 屋代遺跡群・更埴条里遺跡 古代1編』
- [24] 2000 長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27 屋代遺跡群・更埴条里遺跡 古代2編』
- [25] 1989 長野県史刊行会『長野県史通史編第一巻 原始・古代』
- [26] 2000 長野市誌編さん委員会『長野市誌第二巻 歴史編 原始・古代・中世編』
- [27] 1990 佐藤信之「長野県更埴条里水田址の最近の調査から」『条里制研究 6号』
- [28] 1998 河西克造「長野県における水田遺跡調査の現状と問題点」『第8回東日本の水田跡を考える会資料集』

(長野県埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2000年4月4日受理, 2001年9月4日審査終了)

Jori Sites in the Southern Zenkoji Plain

ICHIKAWA Takayuki

There are several locations in the Zenkoji Plain in northern Nagano where Jori system-style land divisions have been found. The first embedded Jori-style rice paddies have been confirmed at one of these sites, the Kōshoku Jori Sites. However, it later became clear that artifacts of embedded Jori-style rice paddies of the same period and the remains of ancient rice paddies were also found at the Ishikawa Jori Sites and Kawata Jori Sites. All of these are sites in the lowlands behind the banks of the Chikuma River. In recent years new discoveries about these sites have been made as these areas were excavated and surveyed on a large-scale as a result of expressway and bullet train construction projects. In this paper the author introduces the aspects of ancient rice paddies in the southern Zenkoji Plain, focussing on results from these excavation surveys.

The following issues are some of those that have been the focus of survey results of recent years. Jori system rice paddy sites that were buried in sand from flooding in the late ninth century were studied extensively. The use of half-size divisions in a wide area becomes known. A group of even older ancient rice paddy sites was also confirmed. It is also surmised that the embedded Jori system rice paddies from the late ninth century were established from the end of the eighth century to the first half of the ninth century and it has become known that there is a possibility that rice paddies that were not part of the division system also existed in an undefined period. This has produced the slight problem of whether the appearance of the Jori system rice paddies occurred in a single step or in stages. The answer to this is inconclusive and it is difficult to raise it as a clear issue, but the author attempts to touch on the subject.